

ジャズ・アナログレコードの適正な再生音量とは？

これはズバリ“等身大”の音量です。“大音量”とか“爆音”という間違いなく誤解を招くのでこういう表現になります。

基準にする楽器としてはピアノが一番適切かと思います。大雑把な言い方ですが、ピアノがあたかも“其処”(といってもすぐ隣りとか何mか離れた所という違いはあるでしょうが)にあるかのような音量です。ピアノの音が不自然に大きいようなら音量は過大だし、小さい=遠いようなら音量は低過ぎるという具合です。

そもそもピアノという楽器はサクソやドラムスと比べて音量を出せません。アップライトの場合はどう頑張っても(ピアノのすぐ傍で)90dBZがせいぜいです。

ピアノ・トリオのサウンドの編集の関係で、ピアノソロの部分の音量を上げてあるのならそれで音量決めをすればいいと思います。

おそらく普通の能率(大体90dB)を持つスピーカーでは定格入力(大体60W)程度の音量になるのではないのでしょうか。言い換えれば“大体目一杯”といったところです。

トランジスタアンプと比べると出力が低い昔の真空管アンプを使う場合は能率が高い昔のスピーカー(大体100dB)を使えばいいと思います。

どのようなアンプとスピーカーの組み合わせでもとにかく100dBくらいの音圧が出せればOKです。

アンプのボリュームの位置が12時くらいになるかもしれませんが、それでもシステムがちゃんと動くようにしておけばいいでしょう。といいますのは、レコードに記録されている音圧はバラつきが大きくて(±7dB程度)、最近の再発盤の場合音圧が極端に低いことがあるからです。

また“等身大”というレベルの音量でスピーカーやアンプが破損するという事態はまず起こりません。そもそもその程度の音量は出せるように設計されているからです。

さて、システムトータルを考えると、レコードの音圧は高い方がいいし、カートリッジの出力電圧も高い方が断然“ラク”です。これは単にS/N比だけのことではありません。

しかし現状はどうかというと、再発盤の音圧は低いし、MCカートリッジの出力電圧は低いし、スピーカーの能率は低いという具合です。

それにもめげず“等身大”の音量を出すべきだということには理由があります。それはレコードを制作する側の立場を想像していただきたいわけですが、様々な段階での様々な調整は“等身大”の音量で為されるということです。彼らはスタジオでの生音をベースに売り物としてのレコードを創っているわけですから、基本的なサウンドチェックを小音量ですということは有り得ないのです。

もし“等身大”の音量でそのレコードのサウンドがダメなら、それは本当のダメ・レコードです。